I(いかん)S(そいつには手を出すな)

まっちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ（いかん）（そいつには手を出すな）

【Ｎコード】
Ｎ８７２３Ｘ

【作者名】
まっちゃん

【あらすじ】
これは、ＡＣｆＡとＩＳのクロスオーバーっていう分類にはいるのか？
【アーマード・コア（ＡＣ）】と呼ばれる、人型の兵器を駆る青年の話である。※作者はＡＣｆＡとＩＳの知識はかなり中途半端です。違う点があれば遠慮なく指摘してくだしあ
もちろん、亀更新です☆ミ

chapther1－1　プロローグてきななにかだと思うかな？（前書き）

新しく書き始めました。ネギま！のほうの更新がとまってますが、
ストックが切れたのでもうしばらく時間が掛かりそうです。
※この小説は見切り発車です。相変わらず亀更新です。作者の独自
解釈、独自設定が飛び出す可能性がたかいです。
そういうのが苦手な方はブラウザバックを推奨します。

chapther1－1　プロローグてきななにかだと思うかな？

この地球上には幾つかの大陸がある。
地球最大の大陸、ユーラシア大陸に始まり、アフリカ大陸、北アメリカ・南アメリカ大陸、オーストラリア大陸に、南極大陸。そして、近年発見された【ヴォルシオーネ大陸】

この最後のヴォルシオーネ大陸はここ最近見つかった新しい大陸で人類の新たなフロンティアとなるはずだったのだが、現代までその大きな大地を隠してきた技術力は遥かに今までのものを大きく上回る。

その大陸の位置は太平洋のど真ん中にあった！！
貿易をせずに発展してきたこの大陸では世界がインフィニット・ストラトス、通称「ＩＳ」に関心を示すよりも前に似たようなものがその大陸では普及していた。

それは【ＡＣ（アーマード・コア）】と呼ばれる、人型の兵器だった。
今現在のヴォルシオーネ大陸では次世代機「ＮＥＸＴ」が主流になっていた。
その大陸に存在する多数の企業、企業に支援されて始めて稼動する「ＮＥＸＴ」。
そんなヴォルシオーネ大陸を治めているのは一つの国

企業主義国家「ヴォルジヴァーナ」

これはその「ＮＥＸＴ」を駆る青年の話である。

ｃｈａｐｔｅｒ１　プロローグてきななにかだと思う

目の前には見慣れた砂漠が広がっている。

砂漠には廃墟が多々ある、今いる場所はそんな廃墟のひとつ「旧ピースシティ」は
俺が自分の機体「ＮＥＸＴ」の『サヴァン』のテストによく使う場所だ。

今日も相変わらず企業連から引っ切り無しに
「新しい装備ができたからテストしてみてくれ」なんて言われてテストをしている。
これがまた面倒なんだよ。この前なんか適当に了承してたら
「この前の装備の感想を（ｒｙ」なんて催促が酷いったらありゃしない。
仕方ないから適当に返事してきた装備を使ってみて感想をメールで
「簡潔」に送っている。ただ一言「ロマンが足りない」とか「見た目が悪い」とかｅｔｃ．．．
どの企業も特化型の武装やら装備しか送ってこないんだよな
汎用型のやつは作らなくてもいいのかなとか思ったけど・・・放置で

そんなこんなで今もテスト中
今俺が使っている機体は確か、「四脚の中量機のデータが欲しい」
とか言われて
スタビライザーがゴッテゴっテついた機体に乗ってるわけですよ。
しかも名前が、「四脚・グリント」って・・・どうなのそれ、安直過ぎない？
それにテスト中というかＡＣに乗ってるときはその搭乗している機体名で呼ばれる。

つまりは『「四脚・グリント」、どうだ？機体に問題は無いか？』・・・こうなる。
なんか、いや。まぁ、次からは「かっこいい名前をつけて欲しい」とでも
感想で送ってやろうかと思う今日この頃です」

『おい「四脚・グリント」！それは後にしろ！今はとりあえず武装の試射をしてみろ』
「了～解」

えっと、武装は両腕に超遠距離スナイパーに背中にも超遠距離スナイパー？
は？意味が分からない

『目標は1．5キロ先に表示されるターゲットだ。全部弾を使うまで終わらないからな。さっさと撃ってしまえ』

「・・・・了解」
オペレーターさんも大概呆れてるな。仕方が無いといえばそうなんだけど・・・
実はこの機体は今ある機体の発展タイプとして送られてきたものらしいんだが、あまりにも元の機体から離れすぎている上に明らかに名前負けという。
・・・「グリント」は「閃光」って意味合いだぞ？
その機体を四脚にした上に完全に支援機としての武装しか積ませないって、どういうことなの？バカなの？死ぬの？

とか思っているうちに全部撃ち終わっていたようだ。
『おい、あまりむちゃくちゃに扱うなよ。後々お前が使うのだから

な』
毎日送られてくる装備の数々はテストした後は大概そのままでテストしたものになっているのが現状だ、わかってはいるのだが聞き返さずには居られない
「えっ？これも？」
『あぁ、それもだ。まだ山ほど（他の武装が）残ってはいるがな』
「はぁ、あんなに気楽に受けた自分が憎いよ」

そう言っても送られてくる装備は減らないむしろ毎日増えてる・・・
ので、機体をハンガーに入れて「四脚・グリント」から降りる
とりあえずは、抹茶ラテでも飲もうかなと思いながら
食堂に向かって歩いていると急にアナウンスが鳴った

『風見　幽史。急いでオペレータールームに来い。』

「呼び出しかよ、抹茶ラテは・・・・飲めないか」

そう一言残してオペレータールームに向かった

このアナウンスが青年の人生を大きく変えることになるとは
まったく思ってないかったのであった

chapter1－2　白騎士事件に介入

『風見　幽史。急いでオペレータールームに来い。』

「呼び出しかよ、抹茶ラテは・・・・飲めないか」

抹茶ラテが飲めないのを悔しく思いながらオペレーター室に向かう。その背中はどこか煤けていたと整備員が言っていたことを彼は知らない。

SIDE：幽史

空気圧の抜けるいい音と共にドアが開く。
大小様々なモニターやキーボードの上に雑に置かれたヘッドセットがまず目に入った。

「ん？幽史か。少し話がある」

そういって椅子をくるりと回して体だけはこちらに向ける女性の髪は背中の中ほどまで伸びるパープルで先端が少しウェーブが掛かっている

彼女は俺の専属のオペレーターの霞スミカさんだ。彼女は辛辣な口調が多く、いやいや俺のオペレーターをやっているのかと最初は思ったがさまざまなミッションをこなすうちに俺に対する心遣いが見られることも多くなってきたので俺はいわゆる「ツンデレ」というやつかと納得している。

「現在お前にはミッションがきている」

「えっ？ミッションならいつも通信だけで企業の仲買人が通達してくるやつでしょ？何でスミカさんがそれの代わりをしてるのか分からないんですが」

「あぁ、それはなこのミッションが最重要機密だからってのもあるが一番大きいのは……」

そこでスミカさんは一旦言葉を切った。

「ＯＲＣＡ旅団としての共同ミッションだからだ」

ＯＲＣＡ旅団として？

「疑問に思っているようだから一応は説明しておく…」

そしてスミカさんの大雑把な説明を聞いた後、もう一度ミッションの概要を聞いた。

ミッションの概要を説明します。

島国「日本」が日本を射程距離に収めているミサイルが全機発射されました。今回のミッションはそのミサイルを日本に一発も落とさないように迎撃してください。作戦領域にはＶＯＢでミサイル郡の後ろから数を減らしつつ、首都、東京近海の上空にて反転攻撃を仕掛けることになっています。

このミッションは衛星軌道掃射砲〔エーレンベルク〕を使いミサイルを全て落とすのが目的です。エーレンベルクは今回のミッション用に小型化されています。このミッション後はあなたの好きにして構わないそうです。あなたが単機で先にミサイルをある程度落としておいてください。そのほうが後が楽でしょう。

またすでに所属不明機体が迎撃しているようです。不明機とコンタクトを取り、出来る様なら協力してミッションを完了してください。

これは、ヴォルジヴァーナの存在を世界に知らしめる重要なミッシ

ョンになります。企業連はあなたを高く評価しています。良い知らせを期待します。

との事らしい。エーレンベルクを小型化とか、何をするつもりなのか小一時間問いただしたいところだが、まぁいい。今はこの作戦に集中しよう。とりあえずはハンガー（格納庫）に行かなければな。

『機体のチェックは済んだか？』

「あぁ、後はＶＯＢの接続を待つだけだ」

今現在は険しい崖に作られたカタパルトにて出撃の最終チェックをしている。今回のミッションはほとんどの確率で空中戦が予想される。機体にはかなりのＥＮ効率とリンクスのＥＮの節約が重要となるミッション中にＥＮ切れで落ちました、とか洒落にならんからな。よって、仕方がなくＥＮ効率がいい〔四脚シリーズ〕を使うことにした。

『ＶＯＢの接続始める』

「了解」

機体からモニターを通じて様々な情報が映し出される。

――ＶＯＢ接続開始――

――メインブースター異常なし――

――サブブースター、スラスター異常なし――
――腕武装、異常なし――
――背中武装、異常なし――
――肩武装、異常なし――
――システムオールグリーン――

「こちら四脚グリント。いつでも出れるぞ」
『了解。――では行って来い』
ＶＯＢを待機状態に移行させ、十分にエンジンが温まったところでカタパルトの枷を外す。
機体がカタパルトを飛び出し、体制を整えたところでＶＯＢが爆発的な加速を始める
――ＶＯＢ巡航モードに入ります――

さて、後は作戦領域付近に近づくまでは時間の余裕ができるさりとて緊張の糸を切るわけにはいかない。さて困ったものだと思い始めていたら急に機体から声が掛かった

『マスター、暇そうですね。話し相手くらいにはなりますよ？』

「！？」

『あれ？マスター私の存在を知らなかったんですか？』

「…あぁ。初めて聞いたな」

『じゃあ、自己紹介です。リンクス支援型ＡＩのミクですぅ』

「あぁ、よろしく。」

『よろしくですぅ』

企業連め、また良く分からん機能を積みやがって……

だがまぁ……嫌いじゃない。

『マスター、作戦領域に入るよ』

「了解」

前方の青い空には黒い点が見えてきた両腕の突撃ライフルを撃てるようにトリガーに指をかける

『作戦領域に突入、良し。後は好きにミサイルを落として行け。出来るだけ落としておけ、後が楽になるぞ』

その言葉のあとすぐにミサイルが射程距離に入った。トリガーを引く、ミサイルが爆発。

『マスター、エーレンベルクのチャージをしないと反転した時に撃てないですよ～？』

「エーレンベルクのチャージを開始」

『エーレンベルクのチャージを開始するよ、2分くらいかかるかな』

「了解」

背中に積んである小型エーレンベルクの平べったい砲身から淡い水色の色を放ちつつチャージを開始する。

というか何気なくチャージ開始したけど、不明機とコンタクトとってないな…でもまぁ、今からしないと使えないし。終わった後にしようか、そうするか。

『マスター、そろそろミサイル郡を越えるよ』

む?、思ったよりも長く考えていたようだ。見ると目の前にはかなり数を減らされたミサイル郡がある、考え事をしていてもある程度は撃ち落としていたか…

そう思っている間にミサイル郡を完全に追い越した。そこには機体と同じ以上の大きさの刀を持った白い騎士がいた。

『VOB使用限界近いぞ――――――VOB使用限界!VOBパージ!』

バシュッ!

VOBが外れて速度が一気に落ちるがまだ完全に落ちきる前にQT(クイックターン)をして勢いを遠心力に変換して体勢を整え、白い騎士のような機体の隣に機体を寄せる。

「誰だ！」

まぁ、いきなり現れたら警戒くらいはするよな……

「こちらリンクス。味方だ。警戒するな……といっても無理があるか。まぁいい。これから広範囲殲滅攻撃を行う。巻き込まれたくなかったら後ろに下がっていろ」

ＳＩＤＥ：千冬

私は親友の束に頼まれてこの束が作った【ＩＳ】、白騎士に乗って日本に向かってきているミサイルを落としている。

私がある程度ミサイルを落としていると白騎士のレーダーが奇妙なものを捕らえた。それはミサイル郡を追うように高速で飛びながら

接近してくる白い四脚の変態な構成の機体だった。その機体は肩が淡い水色に光っている。否、背中の武器が肩上部を通って前面に銃口を向けているそれは５ｍもある大きな薄い板のようなものだった。だがなんで光っているだけなんだ？しかも銃口から銃身にかけての銃のかなりの部分がただ淡い水色に光っているようにしか見えない。手に持ったマシンガンで手当たり次第にミサイルを撃ち落しながらこちらに飛んでくる。

「束！あの機体は何だ！？」

「わかんないよぉ～でも私は作ってないよ？」

束と通信していると件の機体が思ったよりも近くによってきている。

「誰だ！」

そう言うとその機体はどこか疲れたような雰囲気を醸し出しながら通信してきた

「こちらリンクス。味方だ。警戒するな……といっても無理があるか。まぁいい。これから広範囲殲滅攻撃を行う。巻き込まれたくなかったら後ろに下がっていろ」

『ちーちゃん、危なそうだから下がってようよ』

「……了解」

どうやら知らず知らずのうちに気が高ぶっていたようだ。この白騎士には銃器は積んでいないので束と四脚の言う通りに下がっているのがいいのだが、
――――こんな変態な機体で壊せるのか？――――
と疑問に思ってしまう。が、それも肩の淡い水色に光る薄い板のようなものから放たれるエネルギーで
全てのミサイルが落ちていく光景を見て疑問は吹き飛んでしまった。

「ミッション完了。おい、ミサイルは全部落した。そちらはどうするんだ？」

今はミサイルが全部落とされ青々しい空が広がっている。それも2、3分のことですぐに戦闘機や戦闘ヘリ、海には軍艦等が大量に出てきた。

「どうやら各国は今しがたミサイルを全部落した俺達を捕まえようとしているみたいだが、逃げれるのか？」

『こっちには、ステルス機能がついているから関係ないね』

「それはよかった。なら早く行け、俺はやる事が残っている」

その言葉を聴いてから私はステルスモードを起動した

『ちーちゃん、気になるのは分かるけど後にしよう』

『分かった、これから帰る』

そして私は誰にも見つからずに無事に帰ることが出来た

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ……

ＳＩＤＥ：幽史

良し、帰ったな。それでは追加ミッションを始めよう、今回は目標が二つあった。
一つ目は不明機――――――さっきの白い騎士のような機体――――――と可能ならミサイルを撃墜すること。これは今終わった。そして二つ目、むしろこれが本題と言っても過言ではない。

――――――ヴォルシオーネ大陸の存在を全世界に知らしめること――
――――

であるこれは、ミサイルを落した俺達を各国は必ず自国のものにしようと動いてくるのは明白だから『追いつかれない程度に距離をとってヴォルシオーネ大陸近海まで誘き寄せる』。これをするだけで俺の役割は終わりだ。

あとは大陸に掛かっていたＥＣＭを解除してもらえば軍艦なりなんなりの
レーダーで大陸が発見されるだろう。

そうすれば各国の馬鹿共は新しく発見した大陸に自国の領土を持とうと入ってくるだろう

まぁ、そこは消してそこは新たなフロンティアではなく圧倒的な技術力を誇る
変態共の巣窟だと絶望することになるだろうがな

chapter1－3　過剰防衛（前書き）

遅くなりました

chapter1―3　過剰防衛

SIDE：幽史

あの後、やはり外の国々はこのヴォルシオーネ大陸の存在に気がついたようだ今まで追いかけてきた軍勢はそのまま侵略でもするつもりなのだろうか。

だが、ヴォルジヴァーナも黙って自国の領土を侵されることを許すはずがなく企業連のお偉いさんたちのお茶会で撃退することを容認した。撃退にはリンクスとAF（アームズフォート）を何種類か出すことに決定した

――――AF（アームズフォート）――――

それは企業の連中が経済戦争をしていた頃の話までさかのぼる。企業は始めAC（アーマードコア）に当時の全技術力を注ぎ最強の人型兵器を作った。だが、その機体達はある一部の人間しか扱うことが出来なかった。その機体を扱う人のことを【リンクス】と呼んだ。【リンクス】は企業の最重要戦力として位置づけられていた。企業は【リンクス】が自分達の言うことを聞く飼い犬だと思っていたが【リンクス】としてはたまったもんじゃなかった。最初は企業の手先として戦い中で喜びやストレスを発散していたが、一部の過激派は手先であることに不満を感じ暴走した。暴走した【リンクス】により企業は壊滅的

なダメージを受けた。

それ以来、企業は貴重な戦力を一個人に委ねる事を良しとせず代替可能な多くの人員で運用できる戦力を目指した。それが機種によっては全長７ｋｍに迫る超大型機動要塞ＡＦである。

凄腕の【リンクス】たちは圧倒的な戦力差に物怖じすることなく、ＡＦに単身で勝つことが出来るものまで現れた。

【ジャイアント・キリング】は奇跡の親戚に過ぎないものであった。

現在侵略する気満々な軍勢は俺の眼下にいるＡＦ郡が見えてないのだろうか見えてないだろうね、レーダーには俺の機体しか映ってないと思うし。まぁ、それも仕方がないさ、このヴォルシオーネ大陸の周囲５０キロメートルには超強力なジャミングと対ネクスト用のＥＣＭが展開されている

迎撃に使われるＡＦは【ギガベース】【スティグロ】【イクリプス】の３種類で数は５：３：１０の割合で参加している。

【ギガベース】は箱型の双胴船体を持つ拠点型のＡＦでキャタピラによる地上走行能力と海上航行能力を有し、主砲は射程距離と命中精度に優れているが基本的に装甲が薄めであることが弱点であると

いえよう。今作戦では大火力の主砲で航空部隊を墜としてもらう

【スティグロ】は水上戦用ＡＦで射撃兵装はミサイルのみだが大推力のブースターと大型レーザーブレードによる突進は軍艦を一撃で沈めるだけの破壊力を併せ持つ。
また、大型レーザーブレードを射出することも出来る。
今作戦では海上を動き回って敵を撹乱しつつ軍艦を撃破してもらう予定だ

【イクリプス】は円盤に翼が生えたような形状の飛行型ＡＦで大出力のハイレーザーキャノンとミサイルを装備する。ハイレーザーキャノンは機体下部に設置されており、３６０度旋回することであらゆる角度へ攻撃することが可能である。
円盤の真上に対する攻撃手段を持っていないため上空から【ギガベース】と同じく航空部隊を狙ってもらう

『マスター、幾らなんでもこれは敵が可哀相ではありませんか？』

ま、まぁいくら凄腕のリンクスでもこの戦力差をひっくり返すには無理があろう、撤退を推奨すべきな状況だな。明らかなオーバーキルといったところか、哀れな。

「そう言うな、これもミッションだ。確かに企業連は張り切っているとしか言えん戦力だが……」

まぁ、すでに銭は投げられた、いまさら止めれまい

諸君は、このヴォルジヴァーナが世界の表舞台に出るための生贄となってもらおうか

運がなかったと思って諦めてくれ

結果的には白騎士事件の勢いのまま追いかけてきた軍勢は明らかにも過剰戦力としか言えない様なＡＦ郡と謎の白い四脚の機体によって壊滅状態になった

これを気に今までその存在を隠してきた新大陸【ヴォルシオーネ大陸】を国土とする企業主義国【ヴォルジヴァーナ】の存在とＩＳの製作者である篠ノ之　束の「ＩＳにはＩＳでしか勝てない」を信じ

るほかなかった。

国連は白騎士事件の３日後に新大陸【ヴォルシオーネ大陸】と企業主義国家【ヴォルジヴァーナ】の存在を世界放送で流し、世界中の人々が認知した

chapter1－3　過剰防衛（後書き）

主人公の口調が安定しないなぁ

困ったもんだ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8723x/

I(いかん)S(そいつには手を出すな)

2011年11月23日13時51分発行